

令和元年6月13日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02692

研究課題名(和文)他動性に対する「視点」の作用に関する日中対照研究：認知意味論に基づいた誤用分析

研究課題名(英文)Transitivity in Japanese and Chinese from the Perspective of Cognitive Viewpoints

研究代表者

下地 早智子 (SHIMOJI, Sachiko)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：70315737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヴォイスのシステムと他動性の日中差について、日本語と中国語における認知的「視点」の相違という観点から解釈を行うことを目的とする。期間を通し、具体的に実施した研究項目は、(1)中国語について、他動性との相関を視野に入れた動詞のアスペクトタイプにおける「動詞+結果補語」構造(RVCと称する)の位置づけの整理、(2)中国語のRVCをめぐるヴォイスと認知的「視点」の関わり方の説明、(3)日本語を母語とする中国語学習者の中国語作文を用いた誤用コーパスの構築、の3点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、以下の2点である。(1)RVCは中国語において使用頻度が極めて高い述語形式であるにも関わらず、非中国語母語話者には使用の動機が理解しにくい。RVCの動詞タイプにおける位置づけを妥当な形で整理することにより、中国語の類型論的な位置づけの精緻化が可能になる。(2)「視点」の取り方の相違が日中一部の文法現象の相違の要因にとどまるものではなく、日本語と中国語のそれぞれにおいて、話し手が事象を解釈する方法そのものの大きな傾向として記述できる可能性を示した。また、本研究の社会的意義は、以上の言語学的記述の成果を、日本語と中国語相互の言語教育へ応用する可能性が見込まれる点である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to analyze the gaps of voice systems and transitivity in Japanese and Chinese from the perspectives of cognitive 'viewpoints' as defined in cognitive linguistics. We carried out the following three tasks in this joint research: (1) to clarify the proper position of the Chinese resultative verbal compounds with the verbal aspect type system focused on; (2) to illustrate the relationship between cognitive 'viewpoints' and the voice system in Chinese; (3) to build up an error corpus using writing assignments given to Japanese students learning Chinese.

研究分野：人文学

キーワード：ヴォイス 結果補語 視点 他動性 情報構造 誤用分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語を学習する中国語母語話者にとって、日本語の動詞の自他、及びヴォイス構文の適切な使い分けなど、日本語動詞の他動性に関わる諸形式は最も習得が難しく、かなりの上級になるまで誤用の多い文法項目の一つである。金水 2000(「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 2000, 『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, 岩波書店)によると、自他の対を有する動詞には、「主体動作・客体変化動詞」が多いという。我々の初歩的な観察では、中国語の主体動作・客体変化動詞は、自他同形であるか、もしくは「動詞+結果補語」構造(Resultative Verbal Compound。以下、RVC と略称する)となる。そして、中国語の RVC の適切な使用は、中国語を学習する日本語母語話者にとって最も習得が難しく、かなりの上級まで誤用が多い文法項目の一つである。

中国語の RVC に関する日本語との対照研究は、主に相互の複合動詞が対照されており、語構成のレベルにおける類型的な位置づけが次々と明らかにされてきた。また、動詞のアスペクトタイプ分類に RVC を位置付けた先駆的研究である Tai.1987(James H-Y. Tai. 1984. Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories, Papers from the Parasessions on Lexical Semantics, Chicago Linguistic Society, 1984.)による「英語の動作からの視点に対する中国語の結果からの視点」という指摘は示唆的なものである。

本課題では、中国語の RVC を中心に、日本語と中国語の他動性に関わる諸現象について、「視点」の用法に焦点を絞り、相互の相違の所在を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的

本研究は、他動性をめぐる諸形式について、日本語と中国語における認知的「視点」の相違という観点から解釈を行うことを目的とする。動詞の自他やヴォイス構文等の他動性に関わる諸形式は、日中両言語を目標言語とする相互の母語話者に誤用が多いという点で、体系的な相違が予測される文法項目の一つである。

具体的な研究項目は、中国語について、他動性との相関を視野に入れた動詞のアスペクトタイプにおける、「動詞+結果補語」構造(Resultative Verbal Compound。以下、RVC と略称する)の位置づけの整理、中国語の RVC をめぐるヴォイスと「視点」の関わり方の説明、上記に対応する日本語のヴォイスと「視点」の関わり方について中国語との体系的な対応関係の記述、の3点である。

3. 研究の方法

本研究では、日本語と中国語における他動性に関わる諸形式の用法について、「視点」を主軸とした対照研究を行った。研究方法は、先行研究の整理と認知言語学理論に沿った作業仮説を適切な作例のインフォーマントチェックによって確認していく演繹的な研究方法と、日中相互の言語を目標言語として学習する双方の母語話者の誤用データを収集し、統計分析を行う帰納的な研究方法の、両方のアプローチによって進めた。

初年度は、準備段階として、中国語動詞のアスペクトタイプにおける RVC の位置づけに関する先行研究を整理・検討するとともに、誤用分析のための作文のデータ化の作業を開始した。次年度以降は、データ化を完成させつつ具体的な分析を進め、最終年度は、演繹的な方法と機能的な方法の双方を突き合わせた結果をまとめる作業を行なった。

4. 研究成果

研究目的に記した項目の については、下地が中国語学をベースとした日中対照研究、于康が日本語学をベースとした日中対照研究、任鷹が中国語を類型論的に位置付ける試みをそれぞれ

れ進めた。于康と下地は第9回中日対照言語学会(2017年8月)において、パネルディスカッション「他動性、視点及びその周辺」を企画した。この発表において、下地は、中国語のRVCが形態論レベルのヴォイス、すなわち日本語における有対動詞と対照すべきレベルであることを示した。その上で、研究項目 について、日本語の有対動詞がアスペクト的に複合事態における「際立ち」の相違を言語表現に反映させる(有対他動詞は動作者の意図的な動作の局面を際立たせ、有対自動詞は受動者の結果の局面を際立たせる)こと、これに対して中国語のRVCの方は、事態の時間的推移に伴う概念化者の注視点の推移を語順に反映させる形式であり、いずれの意味役割を主格項とする場合においても常に変化の点的局面に際立ちを与える点で、日本語の有対動詞とは根本的に異なることを明らかにした。任鷹はさらに、中国語の他動詞文の語順や、RVCに見られる項解釈の多様性について、項構造による説明の限界の所在を明らかにし、情報構造の観点からの説明がより有効であることを示した。分析の成果は、国際中国言語学会第26回大会(2018年5月)などにおいて、口頭発表し、その後論文として査読付きの学術誌などに公表した。

さらに、研究項目 については、下地がRVCを中国語の動詞の体系における語彙的ヴォイスと構文的ヴォイスの接点にある構造として位置付け、日本語との相違を「視点」の違いから考察した成果を『語法研究と探索』Vol.19(2018年10月)に発表し、続いて、前項動詞が心理動詞であるタイプの構造について、国際中国言語学会第26回大会(2018年5月)で口頭発表したのち、『神戸外大論叢』Vol.69(2019年5月)で論文として公表した。

研究項目 については、于康は、第9回中日対照言語学会(2017年8月)のパネルディスカッション「他動性、視点及びその周辺」等において、日本語の目的語残存受身文の誤用を対象に、主に有題文と無題文が視点との関わりについて論じた。また、研究期間を通して于康が日本語を母語とする中国語学習者の作文をデータベース化し、文法項目ごとにタグ付けする作業を行った。このデータと、于康が研究期間以前にすでに作成していた、中国語を母語とする日本語学習者の誤用データを用いて、3名の研究成果を総合的にまとめた成果を2019年度中に発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計37件)

- 于康、日語偏語語料庫建設と標箋設計の原則、日語研究、査読あり、Vol.10、93-109
Sachiko SHIMOJI、On the Conceptual Structure of “Psych-Verb+si(死)” Compounds and “/e₂(了₂)” in Mandarin Chinese、神戸外大論叢、査読あり、2019年、Vol.69、39-66
下地早智子、從“語言視点”的角度看日漢“詞法性語態”、語法研究と探索、査読あり、2018年、251-260
任鷹、互動式致使結構的語義關係及其生成理据分析、史有為教授八十華誕慶祝文集、商務印書館、査読なし、2017年、84-93
任鷹、現代漢語双及物結構式的語義內涵的再認識、杉村博文退官記念論文集、白帝社、査読なし、2017年、85-99
于康、自動詞の能格化現象と視点の移動、北研学刊、査読なし、2017年、13巻、18-28
任鷹、從生成整體論的角度看語言結構的生成与分析 - 主要以漢語動賓結構為例、當代語言學、査読有り、2016年、第1期、19-37

〔学会発表〕(計12件)

- 任鷹、從語言類型的角度看漢語句法的生成理据、The 26th Annual Conference of International Association of Chinese Linguistics、2018年、招待発表
Sachiko SHIMOJI、On the Conceptual Structure of “Psych-Verb+si(死)” Compounds and “/e₂(了₂)” in Mandarin Chinese、The 26th Annual Conference of International Association of Chinese Linguistics、2018年、英語、査読あり
于康、第二言語習得研究の仮説と日本語の誤用研究の狙い、2018年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム、2018年
任鷹、超越語義角色：漢語賓語成分的信息特徵、第7回當代語言學國際円卓會議、招待発表、

2017年

于康、目的語残存受身文の誤用からみる有題文と無題文及び視点の移動、2017年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム、2017年

下地早智子、從“語言視點”的角度看日漢“詞法性語態”、漢語語法學術討論會第19回大會(中國社會科學院語言研究所、『中國語文』編集部主催)、2016年、中國語、查讀あり

〔圖書〕(計4件)

于康(共編・共著)、2018年、日語格助詞的偏誤研究、下、浙江工商大學出版社、71-77、97-100、170-171、179-196、200-203、207-210、214-216

下地早智子[監訳]、2018年、『認知と中国語文法研究』、日中言語出版社、([原著] 沈家煊、2006年、認知与漢語語法研究、商務印書館、翻譯担当箇所：284-321、379-409、術語対訳索引の作成：434-449

于康(共編・共著)、2017年、日語格助詞的偏誤研究、上、浙江工商大學出版社、1-10、41-43、68-72、135-137、143-145、149-151、154-159、165-168、185-191

于康(共編・共著)、2017年、日語格助詞的偏誤研究、中、浙江工商大學出版社、9-14、31-36、40-45、94-96、108-112、119-121、125-127、166-168、178-180、205-213

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：任鷹

ローマ字氏名：REN, Ying

所属研究機関名：神戸市外国語大学

部局名：外国語学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：40438247

研究分担者氏名：于康

ローマ字氏名：YU, Kang

所属研究機関名：関西学院大学

部局名：国際学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：90309401

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。